

学 位 論 文 要 旨

氏 名 小井戸 あや乃

題 目 金銭感覚を育成する授業開発に関する研究—小学生を対象とした金融経済教育—

研究の目的は、小学生を対象とした金融経済教育を通して家計管理能力と非認知能力を育てることである。子どもの頃から金銭感覚を養い、変化に対応できる能力を身に付けるための金融経済教育の授業開発に取り組んだ。

第1章では、消費者教育及び金融経済教育に関する先行研究、学習指導要領や教科書の移り変わりなどについて概観し、研究課題及び研究方法について検討した。

第2章では、小学生期から楽しみながらお金の計画的な使い方やお金の価値について考えられる新たな「おこづかいちょう」を開発した。基本的な記入欄と月の合計、親からの評価とコメントの記入欄に加えて、週計、知識を付与できるクイズ、支出の可視化、購入した物の振り返りの4つの機能を新たに組み込み、1ヶ月分の「おこづかいちょう」を作成した。また1年間分の「おこづかいちょう」のクイズを作成し、1年間の利用にも対応できるようにした。

第3章では、開発した「おこづかいちょう」を用いた短期間及び長期間の記帳実践、学校行事に関連させた授業実践を行った。この結果、1ヶ月という短期間より、約半年・約1年間という長期で実施することにより、現状把握する能力や「非認知能力」が高まることが明らかとなった。小遣いを渡す保護者が増加したことから、保護者も小遣いを用いた金融経済教育の効果を実感したと言える。また、お金への関心、生活設計と管理能力、自制心の高まりがあった短期間とほぼ同じ効果が、長期間でも持続することが分かった。さらに、修学旅行版「おこづかいちょう」を用いた授業実践では、事前に何を購入するか考えて調べることで、自分1人で買う物を決定すること、事後の振り返りを丁寧なことで、お金の使い方だけでなく、家族のことまで考えることができた。修学旅行でのお金の使い方について、保護者から喜びや感謝、感想が示されることで、児童は自分なりの発見や反省、振り返りの具体性を考えることができた。

第4章では、他教科と連携させた金融経済教育の授業案を開発し、授業実践の効果を分析した。ガチャ擬似体験ゲームに「我慢」という「マシュマロ・テスト」の内容を用いて「ナッジ効果あり」の授業を行うことで、「課金することはよくないことだ」と価値を押しつけるのではなく、課金したいという気持ちにストップをかける自制心が大切であることを自発的に気づかせることができた。我慢や自制心は今後の人生にも関わる重要な力だということを理解することに効果が見られた。また、

「ナッジ効果あり」の授業と算数科の学習を連携させた授業実践では、1等に近づくほど出る確率が低くなるということを理解するだけでなく、計算通りの回数を回しても出ないこともあるということを感じさせることができた。さらに、小学3年生の社会科、算数科、社会見学と金融経済教育を連携させた授業実践では、買い物の観点が広がったり、計画的な使い方を考えたり、適切に購入したりすることができた。また予算を決めることで、自分の目的に合わせて買い物の観点を選び、購入する物を選ぶことができ、非認知能力の自制心や環境に配慮した生活につながる大切な意識も生まれた。

終章では、本研究で得られた知見を整理し、以下の結論が得られた。

短期及び長期間の「おこづかいちょう」記帳実践を行い、お金への関心、生活設計と管理能力、自制心、継続記入による現状把握する能力や「非認知能力」が高まることが明らかとなった。修学旅行と関連させた授業実践では、お金の使い方や家族のことを考えることができ、さらに保護者から喜びや感謝、感想が示されることで、児童は自分なりの発見や反省、振り返りの具体性を考えることができていた。よって、「おこづかいちょう」の記入により、家計管理能力が高まるだけでなく、生きる力につながる非認知能力も高まることが明らかとなった。他教科と関連させた授業実践では、複数の教科の要素が入ることにより、我慢、自制心、計算による実感、買い物の観点の広がり、計画的な使い方、予算に合わせた適切な購入、環境に配慮した選択など、さまざまなことを学ぶことができた。

以上より、金融経済教育を進めることで、非認知能力が高まることが明らかとなった。また、修学旅行や買い物体験は、家計管理能力だけでなく、お金を使う目的、予算内で買い物をするための自制心、相手意識などについても学習できることも明らかとなった。このような経験は、そのときの自分の状況に合った選択・判断ができる力につながり、金銭感覚を養うことにつながるだろう。これらの成果は、今後の家庭科を中心に、小学校での金融経済教育を推進するための一助となると考える。